

翔

2011
December

No.213
百万石蝶談会



能登町鉢伏山でヨコヤマヒゲナガカミキリを採集

大 脇 淳

能登町鉢伏山山頂付近の林道沿いで、偶然ヨコヤマヒゲナガカミキリを採集したので報告する。

2011年9月3日 石川県能登町鉢伏山 ヨコヤマヒゲナガカミキリ 1♂採集 大脇 淳

石川県を離れてもう3年半を超えるが、仕事で能登町鉢伏山に行った際に、山頂付近のブナ林でブナの幹を歩いているヨコヤマヒゲナガカミキリを発見したので採集した。能登のブナ林は、いずれも山頂付近に残された小規模なものであるが、ブナとイヌブナのスペシャリストである本種が、このような小さな分断化したブナ林に生き残っていることに驚かされる。

《おおわき あつし 〒952-1208 佐渡市金井新保乙1087-1 ザ・ビューズ101》

ヨコヤマヒゲナガカミキリを10月16日に採集

浅 地 哲 也

比較的遅い時期のヨコヤマヒゲナガカミキリを医王山にて採集した。石川県では、1969年10月10日や2010年10月3日に七尾市石動山での採集例があるというが、それよりも遅い記録となるので報告する。

2011年10月16日 石川県金沢市医王山 ヨコヤマヒゲナガカミキリ 1♀採集 浅地哲也

末筆ではあるが、本種の遅い採集の情報をご教示いただいた井村正行氏に厚く感謝申し上げます。

《あさじ てつや 〒921-8021 金沢市御影町26-21》

表紙のむし -シルビアシジミ-

日本海を見おろす断崖の草つきに飛ぶ姿は、まるで小さな妖精だ。なのに、私の情熱に大きな火をともした、存在感のある蝶である。19年前の初記録に驚き、16年前の初挑戦で失望を味わい、2年前の再発見では悔しさに支配された。そして昨年のフィーバー。分布や発生期などの初期調査は像を結び始めたが、生態的知見はまだ発展途上である。まだしばらくは、コイツとのつきあいが続きそうだ。愛好の輩を虜にする斑紋上の特徴があるのも、実にいい。

三上秀彦

クスサンを石川県舳倉島で採集

矢田新平

2011年9月23～25日に舳倉島へ鳥類調査で渡島した。今回も、目の届く範囲内で昆虫類にも注視した。台風15号の影響で19日から21日まで風雨の日が続いていたが、22日午後から天気は回復し好天が続いた。

クスサンは、9月25日9時36分、南西の海岸（シラスナ遺跡）に飛来し岩場に止まったところを撮影した後、採集した。富沢章氏によればクスサンは舳倉島初記録とのことであった。



■観察した種類（石川県輪島市舳倉島 2011年9月23日～25日に観察）

1	クスサン	1♂	撮影 採集	矢田新平
2	モンキチョウ	多数	目撃	矢田新平
3	モンシロチョウ	5頭以上	目撃	矢田新平
4	ヒメアカタテハ	40頭以上	目撃	矢田新平
	園芸花に多数訪花していた。			
5	アカタテハ	2頭	目撃	矢田新平
	ヒメアカタテハに混じって観察された。			
6	ルリタテハ	1頭	目撃	矢田新平
7	ルリシジミ	多数	目撃	矢田新平
8	ウラギンシジミ	1頭	目撃	矢田新平
9	イチモンジセセリ	5頭以上	目撃	矢田新平
10	ゴマダラカミキリ	1頭	死体目撃	矢田新平
11	ツクツクボウシ	多数	声	矢田新平

今回は台風通過後の渡島だったので南方系の蝶の迷入を期待したが観察されなかった。異なる種類のトンボが多数飛んでいたが、種名は分からなかった。

最後になりましたが、石川県ふれあい昆虫館館長の富沢章氏にはクスサンに関する情報を提供していただき、お世話になりました。

《やた しんぺい 〒920-0802 小松市上小松町丙192-8》

バリ・スラウェシ 撮影紀行（下）

松田俊郎

■ 5月14日（土） レアンレアンへ

この日は、バンティムルンの手前にある、レアンレアンに行く。

ホテルから車で、約2時間。到着した場所は、町はずれの、田舎の小さな村という感じのところだった。すぐ近くに山があり、その山のふもとに水田が広がっている。こんなところで米を作っているのだ。道は舗装されていないので、時々、車やバイクが通っていくと砂埃があがる。放し飼いにしているのか、鶏をよく見かける。それも、ヒナを何羽も連れてくる鶏が多い。

水田の横に付けられたあぜ道を通って、山の方へ向かって進んで行くと、白っぽい蝶がいくつも飛んでいるのが見える。近づいてみると、ハイイロタテハモドキ (*Junonia atlites*) だった。この蝶も石垣島などで採集されているが、比較的、稀な迷蝶だったように記憶している。水田上をゆっくりと飛び、時々、稲の苗にも止まる。水田をなわばりにしているようにも見える。ビデオに撮っていると、あぜ道に置いていた、私の青色のリュックサックに止まった。(カラー写真A) 多分、リュックサックの汗のにおいに引きつけられたのであろう。

水田を抜けると、小さな池があった。その池のそばで、森さんが木を見上げている。何だろうと思って森さんの視線を追うと、そこにいたのは、オオトカゲであった。70cmはありそうな大物で、高いところにいるから大丈夫だけれど、こんなやつが近づいてきたら、やはり、気持ち悪い。



木に上るオオトカゲ

先に進もうとしたら、木に飛び移ったものがある。15cmくら

いのトカゲで、これは、多分、トビトカゲの仲間であろう。時々、木を突つくような動作をして、黄色い咽喉垂を出し入れする。何をしているのだろうと思いながら見ていると、木を突つく動作は、木を這っている小さなアリを食べているのであった。オオトカゲはグロテスクだったが、こちらは、なかなか可愛いトカゲだった。

草地を進んで行くと、茶色の牛がいた。この村の人が飼っている牛だろう。牛の横を通り過ぎ、さらに進んで行くと、大きな池のあるところに出た。あたりを見渡すと、カワセミがいる。しかし、日本で見るカワセミより青みが強いような気がする。おそらく、日本

のカワセミとは別種であろう。あまり遠くへ行ってしまうと戻れなくなると大変なので、ここらで引き返すことにした。

先ほど、オオトカゲがいたところまで戻ると、大木の周りをゆうゆうとキシタアゲハの類が飛んでいる。ハリフロンキシタだ。どこかに止まらないかとしばらく見上げていたが、そのうち飛んで行ってしまった。

水田のあるところでは、やはり、ハイイロタテハモドキが舞っていた。追いかけ合いをしているものもいる。ここでは、ハイイロタテハモドキが、多数見られた。このようなところが、ハイイロタテハモドキの好む環境なのであろう。

人家のある道のところまで戻ると、ウスキシロチョウがマメ科植物の周りを飛び回っている。このマメ科植物の黄色いとんがり帽子のような花は、石垣島で見たことがある。ウスキシロチョウはせわしなく飛び回り、このマメ科植物に時々、止まっては産卵を繰り返していた。

道の横にランタナの花が咲いていて、その花にカバマダラが来ていた。このカバマダラ、石垣島のバンナ公園で見たカバマダラとは、ちょっと違うような気がするけど、羽を開いてくれないかなあ等と思いながら写真を撮っていると、すぐ横に金色の虫が止まった。この虫は、ジンガサハムシじゃないか。でも、金色の



カバマダラ

ジンガサハムシ (カラー写真B) は、初めて見た。日が当たるとキラキラ輝き、眩しい。これでは、目立ち過ぎてすぐに鳥に食べられてしまいそうな気がするけど、体内に有毒物質でも蓄えているのだろうか。

人家の庭に赤いサンダンカの花が咲いている。そのサンダンカの花に吸蜜にきているのはシロオビアゲハだった。

今日は、バリへ戻ることになっている。約束の集合時間になったので、待ち合わせ場所に行く。ホテルへ帰る途中で、レストランに入り、アイスコーヒーを飲んでのどの渇きを癒し、昼食を食べる。中華そばのようなものを注文したところ、おつまみのようなものがついてきたが、これが劇辛で大変な思いをした。

夕方には、3日間お世話になった永井さん、ルディー君と別れて、マカッサル17時50分発、ライオン航空の便でデンバサールに向かう。

デンバサールには、18時30分頃に到着し、サヌールのパラダイスプラザホテルに直行した。

■ 5月15日（日） ブドゥグルへ

今日は、バリの高地、ブドゥグルへ行く予定だ。

7時半に、パラダイスプラザホテルを出発する。このホテルは、バリの南部、サヌールにある。ブドゥグルは、北部にあるので南から北を目指して車を走らせることになる。運転手は、もちろんインドラ君。デンバサー市内はものすごいバイクの数だし、車間距離が極端に短い。おまけにみんな怖くないのか、車もバイクも、けっこうなスピードで飛ばしている。そして、やはり、二人乗りのバイクが多い。しかし、インドラ君の運転は上手で、バイクをうまくよけるようにして、車は快調に進んで行く。デンバサーの市内を抜けてしばらく行くと、水田やヤシの林が見えてきた。たくさんのヤシの実をつけている木も見える。

9時頃、右手にうっすらと高い山が見えた。バリの最高峰、アゲン山で3000メートル以上もあるそうだ。

植物園を過ぎると、右手に大きな湖が見えた。プラタン湖だ。森さんの持っている高度計は、標高1300メートルを示していた。ここは、バリの有名な観光地だそうである。インドラ君が、「ここは、ブドゥグルです。」というので、どこまで行くのか聞いてみると、ムンドックという村まで行くそうだ。「ムンドック村もブドゥグルに入っています。」との説明を聞いて、やっと理解できた。ブドゥグルは、けっこう広い地域ようだ。



車窓から見えるヤシ林



プラタン湖

しばらくして、今度は左手にまた大きな湖が見えた。ブヤン湖だ。山本さんは、以前、バリを訪れた際、ここに来ているそうだ。

モンシロチョウのような白い蝶が、車の前を横切って飛んで行くのが何度か見えた。多分、カザリシロチョウ（デリアス）だろう。

ムンドック村に着いたのは、9時半頃だった。ここで蝶のガイドもしているワイアットさんの家の空き地に車を止める。この空き地の向こう側は、道を挟んで崖のようになって

いる。そして、道から崖の方を見下ろすと、白い蝶がいくつも飛んでいるのではないか。モンシロチョウのようにも見えるが、飛び方はモンシロチョウよりも速くて直線的な感じだ。ちらっと、裏面のオレンジ色が見えた。

崖を少し降りると、平らになっている場所があった。ここから見ると、蝶を下から見上げることができる。蝶はいくつも飛んでいて、白い花に蜜を吸いに来ているものもいる。吸蜜している時は羽を閉じているので、主に後翅の裏面を見ていることになるのだが、橙色に黒い縁取りがあり、羽のつけ根あたりに筆ですっと引いたような真っ赤な模様が入っている。この真っ赤な模様がアクセントとなり、橙色が一層鮮やかに見える。何とときいな蝶であろうか。この蝶は、オライアカザリシロチョウ (*Delias orais*) の雄であった。
(カラー写真C)

白い花に蜜を吸いに来ている蝶をねらって撮っていると、別の蝶が近づいて来て吸蜜している蝶の周りを飛び回る。そして、近づいて来た蝶が吸蜜している蝶に接近すると、吸蜜している方は羽をベタッと広げるのではないか。(カラー写真D)

これは、交尾拒否行動だと思った。吸蜜している方は雌だったのだ。この雌蝶は、舞うように降りてきて下草に止まった。それでも雄の方は執拗に雌を追いかけ、雌の周りを飛び回る。そして、雄が接近すると雌の方は、また羽をベタッと広げ、今度は腹部を持ち上げるような姿勢を取っている。



オライアカザリシロチョウ(左♂、右♀)

ツマベニチョウで、似た光景を見た記憶がある。多分、この行動は、シロチョウ科に共通する行動なのではないかと思った。雌の羽は、雄のオレンジの部分が黄色になっている。また、羽を広げると前翅はほとんど真っ黒だ。

インドラ君によると、オライアカザリシロチョウが吸蜜に来ている白い花は、カリアンドラという花で、ネムノキの仲間だそうだ。そう言われれば、房状に垂れ下がった白い花をピンクに変え、ピンと立てればネムノキだ。また、葉っぱは、確かにネムノキの葉とそっくりだ。

時期は、雄の最盛期という感じで、雌はまだ少ないようだ。雄の活発に飛び回る様子を見ていると、艶やかな天女の舞を見ているような錯覚を覚えた。

写真を撮っていて、カザリシロチョウが、もう1種いることに気がついた。もう1種は、サンバワナカザリシロチョウ (*Delias sambawana*) だった。後翅裏面は鶯色で赤と黒の紋様がある。この色合いも上品でなかなかいい。こちらの方は、ほとんど見かけなかったので、珍しい種類なのだろう。



サンバワナカザリシロチョウ

少し離れたところに、セセリチョウが止まっていた。ただし、このセセリチョウ、前翅に橙色の帯が入っていて、やはり日本では見られない種類だ。



アカオビセリ

それから、ワイアットさんの家に戻り、アイスコーヒーを入れてもらって休憩する。奥さんが忙しそうにしているのを何気なく見ていたら、アジサイの切り花を束にしている

のであった。これから車に乗せて市場へ持って行くとのこと。アジサイは、日本の梅雨時の花という認識しかなかった自分には、こんなところでアジサイを栽培しているということが驚きだった。

次は、タン布林ガンに行くと言う。ワイアットさんは、バケツに蝶のトラップ用のえさを入れて持って行くとのこと。タン布林ガンは、赤い紋のあるイナズマチョウもいるそうで、期待できそうだ。

ワイアットさんの家を出て、車でしばらく行くと道は坂道になり、どんどん下って行く。こんなところでも、バイクが多い。

15分ほどで、タン布林ガンに着いた。周りを見渡すと民家の横にあじさいの畑が広がっている。ここは森の入口になっていて、細い一本道が続いている。森の中に入ると、思ったほど木々は混み合っていない。鳥の囀る声が聞こえるので、その声のする方を見上げるが、鳥の姿は見えない。木が高すぎるのだ。どの木も20~30メートルはありそうだ。

サルオガセのような薄緑色の寄生植物が垂れ下がっている木をよく見かける。

細い山道を進んで行くと、真っ赤な実のようなものが地面から生えている。これは、何という植物なのだろう。

山道を30分くらい歩いたのだろうか。突然、開けたところに出た。横には、大きな湖が広がっている。タン布林ガン湖だ。涌き水で増水して、向こう側の道は通れなくなっているようだ。

ここから、しばらく行くと道の横に湿地があり、そこで数頭の蝶が吸水していた。吸水している蝶は2種類いて、1種は、レントイシガケチョウ (*Cyrestis lenta*) で、も

う1種は、キミスジ (*Symbrenthia lilaea*) だった。キミスジ (カラー写真E) は、近年、石垣島で発生し話題になっている蝶で、現在も発生は続いているようだ。蝶の吸水している小集団は数か所あった。

このあたりから、山道は上りになり、さらに進んで行くと急な石段のあるところに出た。その石段を一步一步、上っていく。赤い葉をつけた植物は、ポインセチアだ。日本では、クリスマスの頃に見かける花だが、原産地はこのあたりなのかも知れない。石段の途中で、雨が降り出した。嫌な雨だが、止むのを待つしかない。

その場所で20分くらい待っていると雨が小降りになってきた。それで、また石段を上っていくと、すぐ近くにカリアンドラの白い花が咲いている。そして、やはりオライアカザリシロチョウが吸蜜に来ていた。あまり花らしくない花だが、この白い花はデアアスの好む甘い蜜を出しているようだ。

もう少しで、石段を上り切るところだったが、先に上って行った人達が引き返して来たので、一緒に下る。下の方に降りてくると、バイクのエンジン音が聞こえ、ほどなくバイクに乗った数人の若者が現れた。こんな山道をなぜバイクが走るのかと不思議に思ったが、インドラ君によると、これも趣味らしい。バイクで山道を走り回るのが好きな人間もいる



薄緑色の寄生植物



レントイシガケチョウとキミスジ

のだ。そういえば、今日は日曜日だ。

また、雨が降り出したので、急いで引き返す。赤い紋のあるイナズマチョウは、淡い期待も空しく、雨とバイクにかき消されてしまった。

タンブリンガンからの帰り道、だんだん雨脚が強くなってきた。途中のレストランで車を止め、ちょっと遅い昼食にする。高地では、今日のように朝、晴れていても午後は天気崩れることが多いそうだ。聞き覚えのある演歌が流れていたのので、インドラ君に聞いてみると、このレストランのオーナーは日本人ということだった。

夜は、みんなで中華料理店に繰り出し、豪華なディナーを楽しんだ。

■ 5月16日（月） ウルワトゥへ

ホテルでの朝食は、バイキングだった。今日は、この撮影旅行の最終日となる。午前中はウルワトゥ寺院へ行き、午後はバタフライパークへ行く予定だ。

ウルワトゥ寺院は、バリ島の最南端にある。ウルワトゥは、インドネシア語で「岬」の意味だそうで、岬にある寺院なのでこの名がついたようだ。

ホテルを8時に出発。昨日とは反対に南へと向かう。相変わらず、バイクが多いが昨日と比べれば雲泥の差だ。

ウルワトゥ寺院に着いたのは9時過ぎだった。サルが何匹もいる。カニクイザルという種類のサルだそうだが、いたずらもので、気をつけないと食べ物や持ち物を取られることもあるという。

入口で入場料5000ルピアを払い、紫の布を腰に巻いて寺院の中に入る。他にも色々な色の布があったが、この布は入場料を払ったという目印なのだろう。

最初に目にしたのは、ナガサキアゲハだ。だが、雄の後翅表面には青白色の線が入り、日本のナガサキアゲハとは、ちょっと違うようだ。

細い道を降りて行くと急に視界が開け、海が見えるところに出た。ここから先は、断崖絶壁になっている。その断崖に白い波が打ち寄せ、砕け散っている。この海は、インド洋だ。

細い道を左に曲がると、ランタナの花がたくさん咲いていて、デリアスのような蝶が



ウルワトゥ寺院で見た断崖

いたが、吸蜜時間が短く、写真は撮れなかった。ぽつぽつと雨が降り出した。雨はだんだん強くなり、ここにはびしょ濡れになってしまう。途中に休憩所があったことを思い

出し、休憩所へと急いで引き返した。

休憩所では、西條さんが雨宿りしていた。話を聞くと、ツマベニチョウやクロテンシロチョウ等がいたが、雨が降ってきたので蝶は全然、飛ばなくなってしまったとのことであった。雨なので、ここから動けないが、休憩所のすぐ近くの木の葉にマダラチョウの一種が止まっているのを見つけた。ユベントヒメゴマダラだった。(カラー写真F)

30分くらいして、雨が止んだので先ほどの細い道を進んで行くと、前方の石段のそばに大きなカワセミが止まっている。後から来たインドラ君に聞いてみると、この鳥はナンヨウショウビンという鳥で、海岸にいるカワセミの仲間だそうだ。青い羽が、なかなかきれいな鳥だ。しばらく見ていたら、左の林の方へ飛んで行ってしまった。



ナンヨウショウビン

この鳥の後を追って林の中に入ると2つ目の休憩所があり、その休憩所の裏手の木にナンヨウショウビンが止まっていた。近くにもう1羽いる。多分、つがいだろう。

さっきこのカワセミを見つけたあたりに戻ると、海をバックにちらちらと何匹ものシジミチョウ飛んでいる。シルビアシジミのようだ。中国人と思われる20人位の団体が通り過ぎて行く。カップルが多く、新婚旅行なのであろう。

クロテンシロチョウが飛んで来た。ビデオに撮ろうとすると、何だかビデオの調子がおかしい。レンズが曇ってしまったせいかな、焦点が合わないのだ。そこで、カメラで撮ろうとして、初めてカメラがないことに気がついた。しまった。どこかに、置き忘れてしまったようだ。今、来た道に戻って探してみるが見つからない。これは、大変なことをしてしまった。カメラがないと、これまでに撮った写真も水の泡になってしまう。インドラ君が来たので事情を話し、一緒に探してもらったが見つからない。ここは、バリの観光地で多くの人々が来ている。置きっぱなしにしてしまったのだから、誰かに取られたとしても何の不思議もない。

もう一度、自分の歩いたところをたどっていた時、ナンヨウショウビンを追って、休憩所の方にも行っていることを思い出した。そして、休憩所の裏手に行くと、隅っこに、探していた自分のカメラが置いてあるではないか。これほど嬉しかったことはない。天にも昇るような気持ちだった。この時ばかりは、神に感謝した。

先ほどのランタナがたくさん咲いているところに戻ると、デアラスのような蝶が飛んで

いる。しかし、先ほど見た蝶とは、模様が違う蝶だった。

この蝶は、テミナマルバネシロチョウ (*Cepora temina*) だった。裏面の斑紋パターンがオライアカザリシロチョウと似ていたので、てっきりデリアスとってしまったがマルバネシロチョウの1種だった。

インドラ君が呼びに来た。彼にカメラが見つかったこと

を話すと、自分のことのように喜んでくれた。正面の入口まで戻ると、他の人達は、もう戻って来ていた。ココナッツジュースを飲んで休憩する。



テミナマルバネシロチョウ

■ バタフライパークへ そして帰国

ウルワトゥ寺院を後にし、バタフライパークへ向かう車中で情報交換。森さんの話では、タイワンキマダラを採っていたら、カクモンシジミがネットに入ってきたそうだ。奇妙な蝶がいるものだ。山本さんは、アオネアゲハが撮れたと言うので見せてもらう。白い花で蜜を吸っているアオネアゲハがジャストピントで写っていて、金緑色が実にいい色に出ている。そうか、あのお寺にアオネアゲハがいたのかと本当に残念に思ったが、見ていないものは撮れるはずがない。西條さんは、バタフライパークは前に行っているの、散髪屋に行くとのことであった。前もって予約してあったようだ。

途中で簡単に昼食を食べる。ここの店の女将さんは、日本語が上手だった。

バタフライパークには、3時過ぎに着いた。ここでは、ヘレナキシタアゲハ、サビモンキシタアゲハ、オオルリマダラ、アオネアゲハ、ナガサキアゲハ、メガネトリバネアゲハ、ハレギチョウ等をケージの中で放し飼いにしていた。ナガサキアゲハは、交尾しているもの(カラー写真G)や産卵しているものも見られた。これらの蝶の他、ヨナグニサン、巨大ナナフシ、コーカサスオオカブト、コノハムシ(カラー写真H)等の生きた姿を見ることができた。コノハムシを手に乗せてもらうと、体をゆするようなしぐさをするのには感心した。これらの虫を撮り、楽しかったバリ、スラウエシ旅行の締めとした。

そして、バリ 深夜0時45分発 ガルーダ航空882便で帰国の途に着いた。

最後になったが、この旅行を企画してくれた与那国の西條さん、バリ、スラウエシを通してずっと我々をサポートしてくれたインドラ君、バリでお世話になったワイアットさん、スラウエシでお世話になった永井さん、ルディー君、京都の森さん、横浜の山本さん他、みなさんに感謝の意を表し、この撮影旅行記を終えたい。



A ハイイロタテハモドキ



B 金色のジンガサハムシ



C オライアカザリシロチョウ (♂)



D メスの交尾拒否行動



E キミスジ



F ユベントヒメゴマダラ



G ナガサキアゲハ



H コノハムシ

《まつだ としろう 〒920-2133 白山市鶴来大国町ホ94-5》

会員の動き・しゃばの動き

■恐るべしフジバカマの誘引力

白山市瀬戸野で、おおよそ30㎡の花壇に植えられたフジバカマに、次から次へとアサギマダラが飛来し、4日間で約700頭にマーキングできたらしい。同じ時期、宝達山では猛者数人が駆けずり回って350頭にマーキングしている。

■エゾゼミ類の遅鳴き

今年はエゾゼミ類の当たり年で、こんな年は遅鳴きだって遅くなる。これまでは、エゾ10月2日、コエゾ8月20日、アカエゾ8月27日だったが、1～2週間ほど遅くなっているような気がする。

■ハコダテマーク下関で再観察

北海道で放蝶されたアサギマダラは、これまで愛知県で再観察されたのが唯一の記録だったが、本州最西端の下関でも再観察された。このアサギ、石川県を通過した可能性があり、移動ルートが気になる。

■ムラサキ詣で

2005年2006年と続き、2009年にも発生したムラサキツバメ、今年は発生していないかと過去の発生地に足を運ぶ日々が続いていたが、気配はなかった。

■水生昆虫大百科「およげ!げんごろうくん」

ケシとかツブとか言った小さな水生昆虫が、きれいな生態写真で紹介されている。ゲンゴロウやガムシはもちろん、ミズムシやアメンボなどの水生半翅目がこんなにもきれいなのかと目を見張った。神奈川県立生命の星・地球博物館の特別展の展示解説書で、価格は1000円、送料550円。

■医王山小学校の前田兄弟

小学校4年の兄と1年の弟は、昆虫大好き兄弟。既にギフチョウを飼育し、エゾミドリやムラサキシジミなどを手中に収め、近年珍しくなったウラギンスジヒョウモンも採集するなど、活躍がめざましい。来年は学校をあげてアサギマダラのマーキングに取り組むほか、学校周辺で観察できる蝶リストの作成にも意欲を燃やしている。

■ECO選書「地球温暖化と南方性害虫」

主に「害虫」的なものが扱われているが、表紙にはムラサキツバメが飛び、「ムラサキツバメの分布拡大と生活史(井上大成)」が掲載されている。井上氏は、ムラサキツバメの分布拡大の主要因を、人間活動による季節を通した餌の存在としている。

■「ヒマラヤの貴婦人」ついに見つかる

8月12日、最後に残された世界の伝説級の大珍品、幻のブータンシボリアゲハが日本蝶類学会の調査隊によって約80年ぶりに確認された。ヒマラヤ山系の標高2000m以上に分布するシボリアゲハ4種(シボリ、ウンナン、シナ、ブータン)の中で最後に残されていたが、ブータンのタシヤンツェ溪谷でついに見つかった。

■ブータンシボリの奇妙な卵塊

調査隊は、食草らしきものを見つけ出し、卵塊を見つけ、最後に産卵シーンを観察したが、ウマノスズクサの葉裏に規則性無く山のように産まれた卵塊には、確信が持てなかったようで、母蝶の産卵を観察して、ようやく笑みがこぼれたらしい。

■国内では再観察ラッシュ

石川県内で、秋に行われたアサギのマーク総数は3900頭。これまでの率から再観察は50頭前後と踏んでいたが、今年は11月半ばで70頭を超えている。ここまで盛んになったマーキング調査、日本を取り巻く国々でも、盛んにならないだろうか。

■五本脚のゴキ

繰り返される大捕物で脚を失うものの、懲りずに現れる凶太いゴキ。執拗に仕掛けられたトラップに五本脚はかからず、気がつけば壁に止まり、不敵な笑みが脳裏をよぎる。「またお前か」と立ち上がると、ツツ〜と隙間に入っていく。五本脚との戦いはいつまで続くのだろうか。

■鉢伏山でヨコヤマヒゲナガカミキリ

能登半島では、宝立山、鉢伏山・高洲山、石動山の頂上付近にだけ、ブナ林がわずかに残っている。1969年に、石動山でブナ林に依存するヨコヤマが見つかった時には驚いたが、1997年には宝立山、そして今年は鉢伏山で見つかり、能登半島に残存するす

べてのブナ林に生息する事が分かった。

■ 例 会 の 記 録 ■

10月13日(木) 浅地メッキ2階にて、午後8時から開催。

今回は、昆虫好きの前田兄弟について、浅野氏が話題提供。医王山小学校に通う4年生と1年生の兄弟は、採集は言うに及ばず標本の整理も上手で、大型ドイツ箱に展翅標本がズラリと並んでいる。飼育のセンスも良く、来年はギフチョウ成虫からの採卵にも挑戦するらしい。

その他の話題は、能登産シルビアの特徴、瀬戸野のヘリグロチャバネセセリ、二俣のウラギンスジヒョウモン、前浜のリウウキュウムラサキ、ムラサキ色の蝶にときめく、少年自然の家のフジバカマ園、ヨコヤマヒゲナガは大当り、早くもアオマダラが羽化、9月のコエゾゼミ、医王山でエダナナフシなどなど。

参加は、三上、勝海、浅野、松田、福富、浅地、松井、大宮の8人。

■ ■ 表紙デザイン：小幡英典 ■ ■

目 次

大脇 淳：能登町鉢伏山でヨコヤマヒゲナガカミキリを採集	1
浅地哲也：ヨコヤマヒゲナガカミキリを10月16日に採集	1
矢田新平：クスサンを石川県舩倉島で採集	2
松田俊郎：バリ・スラウエシ撮影紀行(下)	3
編集部：会員の動き・しゃばの動き	13

翔 213号

Tobu 2011年12月10日発行
百万石蝶談会
金沢市大場町東871-15 松井方

<http://homepage3.nifty.com/100man/>
☎920-3121 ☎076-258-2727
郵便振替 00750-8-562
印刷 小西紙店印刷所

